【レポート】

2013年７月豪雨災害では、津和野町にも甚大な被害を及ぼした。あれから10年という節目を迎え、組合員の半数近くはこの規模の災害対応を経験していないという現状を踏まえ、防災講習会を実施した。そこから見えてきた防災意識の希薄化や様々なつながりの重要性に対し、組合員としてどう向き合っていくか。自治研部として何ができるかを考察した。

過去の災害から学ぶ「つながり」

── 2013年豪雨災害から10年の節目に ──

島根県本部／津和野町職員組合・自治研部

過去の災害から学ぶ「つながり」

－2013年豪雨災害から10年の節目に－

島根県本部／津和野町職員組合・自治研部

はじめに

- 2013年7月28日
  津和野町において記録的な豪雨災害が発生した。
  河川の氾濫、土砂崩れ、道路寸断、通信障害など甚大な被害を
  もたらした。

- 日最大２４時間降水量　３８１．０ミリ
- 日最大１時間降水量　　９１．５ミリ

あれから10年・・・

- 節目を迎えたいま、組合員の防災意識はどうなっているか。

- 2013年7月豪雨災害規模の災害対応を経験していない組合員
  120人中53人　→ 44.2%（2023年9月12日現在）

10年前のこと

どこか他人事

		組合員数	比率
全体		120	-
	経験者	67	58.8%
	未経験者	53	44.2%

聞いたことはある

いつ起こるか
分からない

忘れてはいけない防災意識

- 過去の経験をそのままにしておいていいのか。
- いつどこでどんな災害が発生するかわからない。
- 豪雨災害から10年という節目を迎えたいま、
  我々はなにを考え、どう行動すべきか。

組合員の防災意識を高める必要がある！

防災講習会の実施

- 目的：組合員全体の防災意識の向上

  未経験者 → 当時の様子や経験者の声を聞き、知ってもらう。

  経験者 → 当時を振り返り、どう向き合っていくかを改めて考えるきっかけにしてもらう。

- 当時の様子や担当者の心境、現場で何が起きていたのかを伝えたい。

→　組合員に向けた防災講習会を実施

防災講習会の概要

参加しやすさ、負担軽減のため
1時間の講習、2会場で開催

- 実施日時：2023年10月17日（火）　18:00～19:00
- 実施場所：津和野町民センターおよび津和野町役場本庁舎
  （本庁舎はオンライン実施）
- 参加対象：津和野町職員組合　組合員

行政の視点
と
支援者の視点
の両面のから振り返る

- 講習内容：第1部　『町防災担当から見た豪雨災害』
  講師：楠　寛（組合員・2013年度町防災担当者）
  第2部　『支援者から見た豪雨災害』
  講師：上田　富晴（津和野町社会福祉協議会総務福祉部長）
- 講習会後はアンケートにより、参加者の防災意識を調査。

第１部　町防災担当から見た豪雨災害

- 講師は当時の町防災担当者　現組合員

- 被害状況や対応状況、豪雨災害となるまでの経緯、当時感じた課題や心境などを行政の視点から説明。

災害直後は大混乱
様々な連携の重要性
担当だけでなくたくさんの人の協力
があって乗り越えられた

第２部　支援者から見た豪雨災害

- 講師は当時のボランティアセンターの運営担当者

- ボランティアの活動内容や設立の経緯、実際の現場でどんなことが起きていたのかなど行政の立場からでは見えづらい一面を、支援者の視点から説明。

災害ボランティアだけでなく
「つながり」を大切に
信頼関係のもとで支援
被災者の安心にもつながる

講習会の参加者

- 出席率は全体で26.5%（120名中30名）

※1　総数から講師と自治研部員を減じた数

※2　出席者数を実質数で除した率

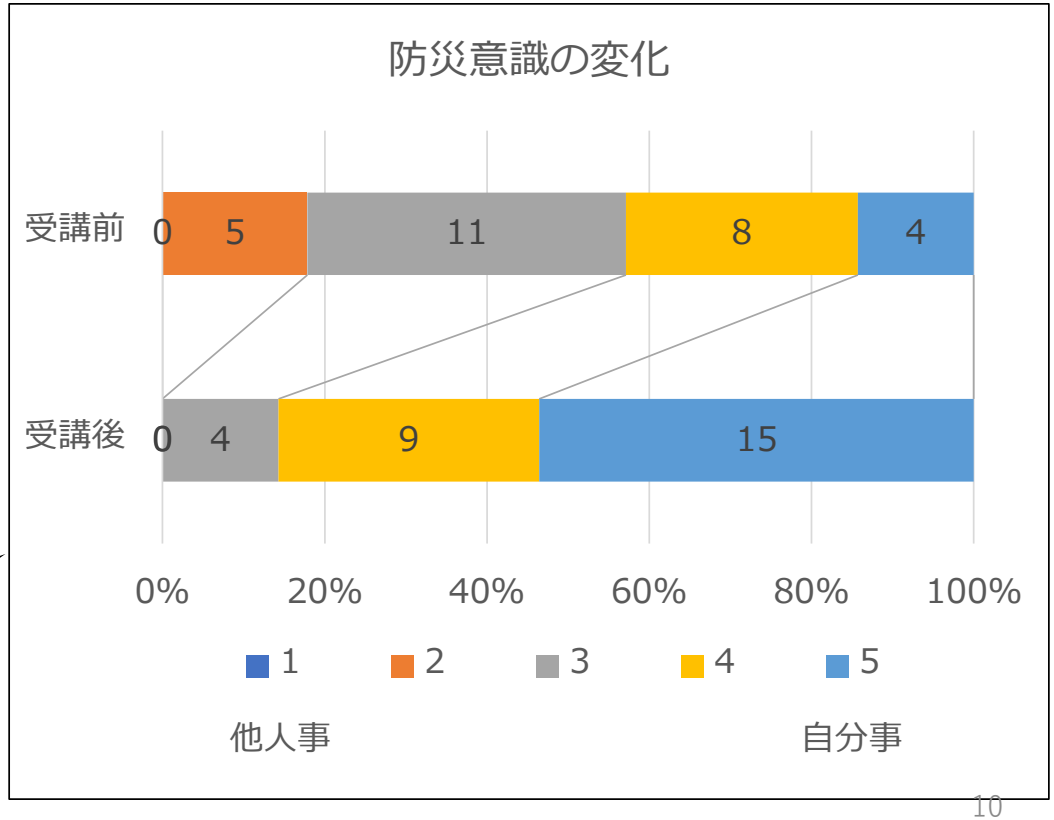
			組合員数		出席者	
			総数	実質数※1	出席者数	出席率※2
全体			120	113	30	26.5%
	経験者		67	63	10	15.9%
		講師	1	–	–	–
		自治研部員	3	–	–	–
	未経験者		53	50	20	40.0%
		講師	0	–	–	–
		自治研部員	3	–	–	–

アンケートの結果

- 自治研部員と講師を除く28名から回答を得られた。

- 講習会の受講前と受講後で
  防災意識にどう変化があったか

1（他人事）～ 5（自分事）
で、防災意識の変化を調査



受講後、自分事として考える人が増加した

アンケートの結果

- 未経験者
  「全然知らなかった」「心構え、意識が変わった」
  「想像するだけでは難しいので話を聞けてよかった」
  「知らない状態での災害対応はより難しいと思った」

講習会の内容は好評。
講演時間については、
もっと聞きたかった
との意見も。

- 経験者
  「本当に大変だった日々の記憶がよみがえった」
  「支援者からの視点は知らないことばかりだった」
  「忘れないためにも定期的に講習会が必要」

講習会を経て・・・（よかったこと）

① 過去の災害を見つめ直すことができた
経験者にとっては当時の苦労やもっとこうすればよかったという
反省などを思い返すきっかけになったとの意見多数。
未経験者には新たな学びの場となった。

② 参加者の防災意識に変化
受講後に、自分事として認識する人が増加した。
未経験者は過去の災害を知ることができ、防災意識が高まった。
経験者は改めて振り返り、思い直すきっかけになった。
特に支援者の視点は知らないことも多く、新たな気付きがあった。
もっと知りたい、聞きたいという意見も多数。

講習会を経て・・・（見えてきた課題）

① 参加者数が低調

参加しやすい環境づくりに努めたものの、出席率26.5%

→ 10年という歳月の中で風化しつつある？

② 知らないことがまだまだ多い

経験者であっても、新たな気付きはたくさんあった。（支援者の視点）

③ 参加者以外の意識調査ができていない

組合員それぞれの防災意識が見えず、次のアクションを起こしづらい。

10年という節目を迎えて

- 気候変動などによる自然災害のリスクは年々高まっている。（大雨・地震・台風・雪害・・・）

いつ来るか分からない

イメージが湧きづらく、防災意識モチベーションの維持が困難

経験がない

- 大規模災害を乗り越えた町の組合員として、いまなにができるか。

非常持ち出し品、避難場所や避難経路の確認、災害を想定した訓練など・・・

過去の経験を風化させない
絶えず伝え続けなければならない
↓
過去の災害対応から学んだことは？

→

「つながり」が大切

様々なつながり

- 関係機関とのつながり
  → 災害時の協力関係、災害訓練、
  連携体制の構築

- 地域住民とのつながり
  → 災害時の安心感、小さな町だからこその信頼関係

- 組合員同士のつながり
  → 助け合い、単組を越えた支援
  （災害派遣など）

自治研活動により、
つながりを一層強くできるのでは

まとめ

防災意識の向上をめざした防災講習会から自治研活動の重要性も再認識した。

- 過去に経験した大規模な災害の記憶、
  防災意識が10年という歳月で希薄してきている。
- いつどこで起こるか分からない状況で、防災意識を維持しづらい。
- 講習会を開催して、
  過去の災害で学んだ様々な「つながり」の重要性に気付いた。
- 日頃から地域や組合員同士で「つながり」を持つことが、
  防災行動のひとつになる。（地域に密着した自治研活動は防災につながる！）

組合活動を活発化させ、つながりを高めよう　→ 自治研活動の出番！！！